

研究紀要「三星霜」巻頭言

～ 生徒が「山門は楽しい」と言葉にしてくれる、その「楽しい」の質を高めるために ～

校長 長 俊 一

昨年度に本校に着任してみると、「研究紀要」の発刊が途切れていることに気づいた。いつから、なぜ途切れたのであろうか。私たち教職にある者の責務である「研究」と「修養」の成果を集約した、いわば山門の“叡智の結晶”ともいうべきものがないのは、いかにも寂しい。

私はこの山門高校での勤務が、この度で3度目となる。何と言っても、教師駆け出しの初任校である。大学を卒業して間もない、右も左もわからぬ生意気な若者を、7年かけて「教師」として育てていただいた学校である。教師が育つから、もちろん生徒は育つと信じている。とりわけ、1年目から7年間の野球部との関係は深く大きい。野球部の生徒、保護者の方々、外部監督さんとの出会いがあったからこそ、私の教師人生のスタートが山門高校野球部顧問であったからこそ、「このような教師である私」になっているように思う。特に、同窓生の外部監督さんの、言葉では言い尽くすことのできない熱心な指導に、教師とは何かということを深く学んだ。この学びこそ私にとっての「初任者研修」であったと言っても過言ではない。



厚さ8ミリほどの研究紀要ができました。なお、書名の「三星霜」は校歌2番の歌詞からとり、芸術科書道の講師 松尾 理恵子先生の揮毫によるものです。研究紀要なら中身が勝負やろ。表紙と巻頭言かい？と苦笑、失笑であろうかと思いますが、研究紀要復活にかけた校長の思いをおくみとりいただければ幸いです。

「昭和」から「平成」へと元号が改まった年に、小郡高校に異動した。この初めての異動も、私にとって大きな転機になった。この「長」が小郡高校で“ヒット”したのである（そう思わせてくれる生徒たちとの出会いがあった）。なぜヒットしたかと言うと、やはり山門での“蓄え”である。それは、一つには初任から3年ほどたったころからであろうか、山門のこの「研究紀要」に掲載していただこうと、毎年度の夏季休業中に1本、レポートを書くことを自分に課したのである。もちろん、今読み返してみると、実に稚拙な内容であろうし、今振り返ると、やはり「若気の至り」であったと思う。しかし、レポートの内容の審査を受けて掲載され、当時の中村奨佑教頭先生から「あのレポートはよかったね」という言葉をいただいた時の嬉しさ、その場面は今でも忘れられない。そして、稚拙なレポート以上に、生活記録やきめ細かな生徒との関わり方など、私が山門で見よう見まねで身につけていた（のであろう）山門らしい指導の在り方が、小郡高校の生徒の皆さんや保護者の方々求められたのではないかと感じている。

さて、学校ではいよいよ学びの道しるべである学習指導要領が変わる。いわば“学ばせ方改革”の始まりである。当然、高校での学びを評価する大学入試の在り方も変わるし、受け入れた学生に対する“学ばせ方改革”も、文理融合、ダイバーシティの環境の中での学び、英語「を」学ぶのではなく英語「で」学ぶ授業の実施、海外留学の必修化等々、時代の要請の中で急速に進められている。学校教育を取り巻く環境は、短期間のうちに、大きく、強いうねりをもって変化している。

このような状況に対応すべく、本校においては昨年度に、今、私たちが預かり目の前にいる生徒の中学校時代の学び、授業改善の在り方を学ぼうと、みやま市内の中学校を中心に授業を参観させていただいた。これを生かすべく、本年度は全ての職員が年度内に1回以上の研究授業を行い、職員に、中学校や小学校の先生方に公開し、授業力の向上に努めた。

加えて、やはり全ての職員が「One テーマ課題研究」に取り組んだ。「教育活動に課題研究的に取り組めば、日々の教育活動が“検証”の場となり、教育活動の質が向上する」という仮説のもとに、自身の課題を意識し、課題解決の手立てを講じ、試行錯誤、創意工夫に努めた。課題研究の深さに個人差は見られるが、まだ「One テーマ課題研究」に一歩踏み出したところであり、今後の「進化・深化→真価」となっていくこと、これらのことをとおしての研究と修養の積み重ねこそが、生徒が「山門は楽しい」と言葉にしてくれる、その「楽しい」の質を高めることになっていくことを期待してやまない。

とにかくにも、私たちはプロである。生徒の前に立ち、生徒の成長を導き支える立場にある。プロなのだから「これまで」ではなく、「これから」で勝負！山門を頼みにしている生徒の皆さんをどのように大切に育てていこうかと、やってみたいことが“やま盛”ですよね。「魔法はない。愛情はある。」ですものね。